

【書評・紹介】

細川周平 (編著)

『音と耳から考える—歴史・身体・テクノロジー』

(アルテスパブリッシング, 東京, 2021年, A5判, 611ページ, 5,000円+税, 第1刷)

井上 淳生



「音楽」という概念からいったん離れ、それよりももっと手前にある「音」に注目した英語圏の研究分野に「音研究 (sound studies)」がある。従来の音楽研究では、実はあまり対象とされてこなかった「音」に関心を広げる姿勢が共有された分野である。ここからの刺激を引き受けつつ、日本独自の音研究を展開する端緒として編まれたのが本書である。

本書は、国際日本文化研究センターにおいて、2017年度から3年にわたって行われた共同研究の報告である。母体となったのが研究班「音と聴覚の文化史」、通称、「音耳班」である。(民族)音楽学、サウンド・アート関係の知人10名ほどの「こじんまりとした親睦団体」をイメージして始まった音耳班は最終的には30名を越える大所帯となり、そこにゲストスピーカーやオブザーバーも加わることで、近年の音楽分野の研究では他に類を見ない規模のコミュニティとなった。

600ページを越える本書は10部からなり、各部に2~4編の論文が配されている。加えて、ところどころに「エッセイ」が登場する。少々紙幅を要するが、以下では全体像をイメージして頂くために目次を記しておきたい。

I部 響きを聴く——認識と思索

- 第1章 ちんどん屋の「響き」から考える——日本と英語圏の音研究／サウンド・スタディーズ (阿部万里江)
- 第2章 聞こえないものを聞く——水面下の音がもたらす知覚と想像力 (岡崎峻)
- 第3章 ベトナムの一弦琴「ダンバウ」の音響 (昼間賢)
- 第4章 祭祀芸能における〈音と超越性〉 (春日聡)

II部 聞こえてくる音

- 第1章 鈴木鼓村『耳の趣味』を読む (齋藤桂)
- 第2章 浅草興行街における小芝居の音 (土田牧子)
- 第3章 戦前の騒音問題——テクノロジーと生活の軋む音 (細川周平)
- 第4章 規制管理される音——東京と福島 (リチャード・チェンホール／タマラ・コーン／キ)

ャロリン・S・スティーヴンズ)

[エッセイ] 騒音と「法悦境」のあいだに——山田耕筰の音と耳 (榎大也)

III部 戦前期昭和の音響メディア

第1章 方法としての音——フィールド・スタジオ録音の「共創的近代」論序説 (山田文登)

第2章 感性史のなかの戦争——音響学者・田口柳三郎にとっての「音と戦争」(渡辺裕)

第3章 大大阪のラジオ放送——文化と文明のはざままで (長崎励朗)

[エッセイ] フィールドレコーディング作品とその文脈 (柳沢英輔)

IV部 音を作る共同体

第1章 昭和前期の松沢病院にみる「慰薬」——治療と日常のあいだに響く音 (光平有希)

第2章 旅するオーディエンス——温泉地の聴取環境考 (葛西周)

第3章 有線放送電話の声空間——秦荘有線放送の場合 (細馬宏通)

V部 芸能化の文脈——ラップと太鼓

第1章 信号音から民俗音楽へ——諏訪地方におけるラップ文化の生成 (奥中康人)

第2章 太鼓音楽の伝承と創作——小口大八の活動を中心に (中原ゆかり)

第3章 芸能になる・スポーツになる——中国龍舞の音をめぐる価値の変容について (辻本香子)

[エッセイ] おわら風の盆の夜を聞く (長尾洋子)

VI部 鼓膜の拡張——音響テクノロジーの考古学

第1章 スコット・ド・マルタンヴィルの業績を再検討する (福田裕大)

第2章 電話は耳の代わりになるか?——身体の代替性をめぐる音響技術史 (秋吉康晴)

第3章 拡声器の誕生——電気音響技術時代における拡声の技術史と受容史 (福永健一)

第4章 みずからの「きこえ」——イヤフォンによる「聴力」と「補聴器」(瀬野豪志)

[エッセイ] 「口と耳のあいだで」(伊藤亜紗)

[エッセイ] フィジカル・リスニング——聞こえない身体による聴取 (木下知威)

VII部 ステレオの時代——聴く、録る、売る

第1章 見えるものと見えないもの——初期ステレオ経験の〈語り〉をめぐって (福田貴成)

第2章 市民による音づくり——映画評論家、萩昌弘のオーディオ評論 (金子智太郎)

第3章 「洋楽」をつくる——1970年代後半国産ディスコの産業と文化 (輪島裕介)

[エッセイ] MDが架橋するメディア技術 (日高良祐)

VIII部 物語世界論への挑戦

第1章 映画にとって「物語世界の音」とはなにか——ヤン・シュヴァンクマイエル『アリス』を例に (長門洋平)

第2章 ゲームにとって音とはなにか——ダイエジーシス (物語世界) 概念をめぐって (吉田寛)

IX部 サウンドの表現者

第1章 日本における〈音のある芸術の歴史〉を目指して——1950～90年代の雑誌『美術手帖』を中心に（中川克志）

第2章 感覚のアート——フルクサスの実践から（柿沼敏江）

第3章 OFF SITE、ON SITE——2000年代初頭のオルタナティブ・シーン（横井一江）

〔エッセイ〕 非アカデミックな日本のアヴァンギャルド・ミュージックの成り立ち（石橋正二郎）

〔エッセイ〕 即興演奏とアジアの音楽家との交流（大友良英）

X部 デジタル・ミュージッキング

第1章 イメージを移植する耳——初期パソコン受容に見るミュージシャンシップの形成（谷口文和）

第2章 いつか音楽と呼ばれるもの 詩論その2（城一裕）

第3章 私たちはもっとうまくできます——ライブ・コーディングの起源と意味を再考する（久保田晃弘）

〔エッセイ〕 真夜中の橋の上での出会い——ネットワークミュージックの夜明け 1976～1979（ポール・デマリニス）

編者あとがき（細川周平）

以上のように、音と耳に関連するテーマは極めて多岐にわたる。裏を返せば、音に関わる研究には、これから取り組むべきことが山積しているということでもある。以下では、英語圏の音研究（sound studies）の成立と現状を解題する阿部論文（I部第1章）を取り上げることで、本書の学術的位置付けに触れておきたい。

阿部は研究者としての研鑽を北米で積み、現在、ボストン大学で教鞭をとる音楽人類学者である。阿部は「国際的な学問の言説を組み立てている英語中心のヒエラルキー」（p.37）¹をはっきりと見据えつつも、「音研究における英語圏の言説と相対的な距離を取っているからこそ生まれ」（p.37）る可能性を本書の試みに見出している。

阿部によれば、英語圏の音研究がひとつの学問分野として形を帯び始める時期は2000年代初頭に認められるという。その要因のひとつとなったのが「聴覚的方向転換（auditory turn）」である。近代西洋の知的生産においてこれまで特権的な地位に置かれてきた「視覚」を相対化し、聴覚にまつわる諸領域を知的探求のフィールドに位置付けようとする動きである²。聴覚の「復権」は、単なる研究領域の追加を意味するにとどまらず、人文社会科学における多くの分野がそうであったように、近代西洋の知的生産のあり方を根本から問い直す契機ともなった。

音研究の学術的基礎のひとつにカナダの作曲家、マリー・シェーフアーによるサウンドスケープ論がある（シェーフアー 2022=1977）。人工音に対する「自然な音」の価値を積極的に評価したサウンドスケープ論は、音楽を対象とする人類学者を含め、多くの研究者をひきつけた。シェーフアーの思考を批判的に継承したスティーヴン・フェルドは、「音響認識論（acoustemology）」という概念を考案し、世界を知るための方法としての音を理論化した。フェルドにとっての音とは、単なる客観的事象として対象化するにはあまりにも多くの作用を生起

し、媒介するものであった。

こうした研究上の遺産の上に成り立つ音研究において、近年、注目を浴びるようになってるのがエスノグラフィーの理論と方法である。阿部は「音とは人間の諸感覚によって知覚された現象であり、客観的な音響学的現象であり、社会的メタファーでもあり、また聴く実践を考察する媒体でもあると考へうる」(p.43)と述べたうえで、音の実相、音が媒介する現実の内奥に分け入っていく際のエスノグラフィーの可能性を示唆している。

音研究は、視覚中心主義ならびに西洋的知的生産のあり方の問い直し、音楽概念の構築性への注目、さらには、音の発生あるいは聴取の主体を人間に限らない方向での検討へと向かっている。阿部はこうした流れに自身の学術的立ち位置を確保しつつ、長年フィールドとしてきた大阪のちんどん屋におけるエスノグラフィーで得た概念「響き／ヒビキ (resonance)」の可能性を模索している。

本書はその副題にもある通り、音を中心に歴史、身体、テクノロジーを縦横に論じるためのアイデアの源泉である。本書を介して立ち上がるさらなる問いは、読者が各々の知見を練り上げるための導きとなるはずである。

注

- 1 桑山 (2008) 第3章「人類学の世界システム」参照。
- 2 この立場は感覚の人類学 (sensorial anthropology / anthropology of sense) と大きく異なる点である。感覚の人類学では、感覚のなかで特権化されてきた主に視覚と聴覚を相対化し、西洋的な感覚のパラダイムに基づく諸感覚間の序列化を批判する姿勢が打ち出されている。近年では、複合的な感覚経験をとらえるうえで、特定の感覚に還元することなく全体としてとらえる視点が取上げられ、「多元感覚 (multisensory)」という概念が提起されるようになってきている (宮坂 2020)。なお、感覚の人類学については、本誌第16号 (2020年) 掲載の書評 (ボレイコ 2020) や比嘉 (2015) によるレビューが分かりやすい。

引用文献

ボレイコ・インガ

- 2020 「書評 Le Breton, David, Sensing the World: An Anthropology of the Senses. Bloomsbury Academic, November 2017」『北海道民族学』16: 78-79.

比嘉理麻

- 2015 「変わりゆく感覚—沖縄における養豚の専門化と豚肉市場での売買を通して—」『文化人類学』79(4): 357-377.

桑山敬己

- 2008 『ネイティブの人類学と民俗学—知の世界システムと日本—』弘文堂、東京.

宮坂敬造

- 2020 「感覚人類学の新たな展開—多元感覚人類学への道筋拡大と情報社会の進展へ応用可能性—」『東京通信大学紀要』2: 169-185.

シェーファー・R. マリー

- 2022 (1977) 鳥越けい子ほか (訳) 『〈新装版〉世界の調律—サウンドスケープとはなににか—』平凡社、東京.

(いのうえ・あつき／茨城大学)